The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ＜書評＞小高敏部著　松永貞徳の研究 ／万葉大成総記篇 |
| Author(s) | |
| Citation | 語文. 1954, 11, p. 32-33 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68449 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 書評

# 松永貞徳の研究

小高敏郎著

松永貞徳は多くの意味で近世日本の黎明期であった織豊期から徳川初期にかけて活躍した偉大な文人であり、近世文芸復興の先駆者として、殊に俳諧中興の祖として、其の名は余りにも有名である。が此の巨匠に対する研究は従来意外な程少なかつた。過渡期の文学が宿命的に持つ文芸的価値の低さ、それに資料蒐集の困難等が大きな壁となって、長い間等閑に附され停滞を余儀なくされてゐたのであらう。個々の問題を取上げた論文は諸雑誌に若干散見するが、纒ったものとしては「日本文学大辞典」の「貞徳」の項（志田義秀博士執筆）等が従来の水準を示してゐる程度であった。が、過渡期こそは時代を動かす諸動力が最も積極的に明確に働いてゐる時期であって、是が研究は地味ではあるが後続の時代や文化の本質を知る上に必要缺くべからざるものである。殊に現代の如き一大過渡期に於ては、其の意義は更に大きく単に過去の問題の把握解明には留まらない筈である。本書の研究も、何かさう言ふ時代の息吹に感じて始められたと云ふ事が、序文の中からも窺へる。そして其の事が本書をして単なる貞徳の年譜考証に終らしめず、過渡期を力強く生き抜いた逞しい人間像の追求と云ふ新しくも切実な主題を追はしめる事となったのである、と思はれる。

それにしても、A5版四二〇頁に及ぶ此の大著は、先づ貞徳の伝記的研究として空前の物たる事を指摘せねばなるまい。伝記資料は、貞徳の自著・連歌懐紙・短冊の類から、師友後輩等の日記・語録・詩文集等、其の他の関係書類に至るまで、飽くなき捜索の結果豊富に蒐集されたもので、新紹介の資料も多い。それら諸本の比較や真偽鑑別・成立年代の推定等文献学的調査の過程は、其の結果と共に随意に語られてゐて親切である。又記事の解釈、年代の推定、誤伝等に関して、従来の説を訂正してゐる箇所も少くない。本書の叙述は、これらの伝記資料を年紀的に整理し、再構成したものである。

叙述の範囲は、年代的には父永種から貞徳一代を主要部分としてゐるが、附篇として、代々武家の名門であった祖宗や貞徳創始の家塾を継承した子孫の事、遺跡の事等に関するかなり詳しい記述があって、参考になる。注目すべきは貞徳と関係浅からぬ師友、九条稙通や細川幽斎・里村紹巴・山科言経・藤原腿窩・林羅山・英甫永雄・木下嘯子・本阿光弥悦等、当時の錚々たる文化人数十名の動きに就いても詳細な記述を並行させてゐる事で、貞徳の教養の形質を知る上に種々啓蒙される事が多いのみならず、当時の堂上地下を通じての文壇史と云ひ得る規模を有ってゐるので、ひとり貞徳研究者のみならず、一般読者にも興味深い示唆に富む内容と云ふ事が出来よう。又此の時代は日本歴史が全国的、否、国際的な規模に於て動いた時期であって、政治、社会、思潮、世相等が激変したが、著者はさうした時代的背景にも深い考慮を払ふ事を忘れてゐない。これらは貞徳関係の資料の手薄を補ふ意味よりも、積極的に貞徳の生きた姿を髣髴せしめる便りになってゐる様である。

勿論これらは最初から著者の野心的な意図の中に含まれてゐた事であらう。而してそれらの意図を最も効果的にしてゐるのは、著者が右の如き考証的叙述の間に屢々投じた批判や品隲である。これは最初に著者が断つてゐる如く、著者自身の人生観を投影したものであるが、偏狭なイデオロギー的なものはなく、甚だ穏健であり、且つ控へ目である。これが全篇に生気を漂はせ、かなり重複が多く（著者の親切からであらうが）羅列的な編年史を、兎も角最後迄人を飽かしめずに読ませる力になってゐる事は事実である。が、客観的記述を専とする学風に対し、特に斯る主観的叙述の意義を説かれる著者としては、此の程度の感想を述べられた位では余りに遠慮が過ぎはしまいかと思ふ。例へば混乱の世に堂上的教養を豊かに受け、卑俗を避けてゐた貞徳が、徳川氏の格式固定の政策が始るや、庶民俳諧の指導者に転じた等、彼も処世に巧みな才人とし、温和不争の性格と解釈するだけでは、尚外面的な感想の域を脱しまい。恐ら

く著者の脳裏にはもっと明確な貞徳の人間像が描かれてゐる事であらうと思ふのである。それともそれを要求する事は、著者に創作を要求する事になるだらうか。

尤も緒言によると、本書は著者の貞徳研究の第一部、伝記篇とも称すべきものである。とすれば将来其の文学を精細に辿られた成果の発表を見る日があらう。筆者の希望は其の日に満さるべきものかも知れない。

（昭和廿八年十一月廿五日、至文堂刊、七百円　文部省出版助成金による出版）

――鈴木――

## 万葉大成総記篇

我国の古典の中で最もその研究の進んでいるのは万葉集であろう。今日迄発表されて来た研積業績は実に厖大なものである。万葉集大成は従来万葉集の各〻の研究部門に於て達せられた研究成果を纏めて集大成し、諸研究の到達点を示すと共に、今後の研究の課題を指示するものといえよう。

今、こゝに取上げた総記篇は跋文に久松潜一博士が述べておられる様に「第二巻以後の各編に入る為の序説であり、本大成の体系を要約したもの」である。その内容を紹介すると、書誌的研究として「万葉集の成立」（武田祐吉氏）「万葉集編纂目的の考察」（尾山篤二郎氏）「万葉集巻々の性質」（沢瀉久孝氏）が収められ又、万葉集を形成する地盤の歴史社会的地理的研究として「万葉集の歴史的地盤」（高木市之助氏）「万葉集の地理的環境」（坂本太郎氏）「古事記と万葉集」（山田孝雄氏）の諸論文が収められている。更に又、文芸学的文学史的研究として「万葉集の美と思潮」（岡崎義恵氏）「万葉集の歌躰と風格」（久松潜一氏）「万葉集と歌風の変遷」（風巻景次郎氏）「万葉集伝説歌考」（松村武雄氏）が、又、文化史的研究としては「万葉集の歌語」（吉沢義則氏）「万葉集と方言」（東条操氏）「万葉集と民俗学」（肥後和男氏）「万葉時代の美術」（野間清六氏）「日本の文化的性格と万葉集」（長谷川如是閑氏）の諸論文が収められてゐる。各論文の執筆者は、従来数多くの研究を発表してこられた、権威者であり、それらの所論は今日に於ける最高水準を示すものであるが、いま一二気附いた点を紹介して見ることにする。

高木氏の「万葉集の歴史的地盤」は万葉集を単に文学としてのみ考えようとする孤立的立場を排して飽く迄も文学作品として見るのは云うまでもないが、それと同時にその文学性をそれらの作品が生み出された歴史的地盤との関係に於て考えて行こうとしておられる。そして人麿の高市皇子の挽歌と、赤人の吉野駕の作をとりあげて、高市皇子の挽歌では人麿に見られるエネルギーは、英雄時代の残照を再現させた所の壬申の乱を、舎人として共に戦ったという歴史的背景によるものであるとし、又吉野駕従の作に於ける人麿の豪放な充足感と赤人の空白感との差違を、前者は壬申の乱の体験者として天皇と共に戦った舎人としての皇室謳歌であり、後者は、吉野に対する特殊な愛着もなく単なる行楽に過ぎぬ行幸の供奉者としての赤人との相違によるものであると述べておられる。勿論この様な見方だけで以てすべてを割切ることは無理であり、そこに働く個人性を無視することは出来ないであろうが日本の古典文学の種〻相を歴史的地盤から検討して行くことは今後に於ける課題となるであろう。

風巻氏の「歌風の変遷」に於て注目されることは、歌風の変遷を区切るのに、歴史的実年代に即して考えるのは無理があるとして、発展段階的な見方をとっておられることである。即ち、歌風の変遷を、原始段階―民謡的、第二の段階、混沌的、第三の段階、開化的、第四の段階悒情的の四段階に分け、原始段階では民謡を、第二段階では、人麿を、第三段階では憶良、旅人、赤人を、第四段階では家持をとりあげて、原始歌謡から個人の抒情詩に至る迄の発展段階を説いておられる。此の様な見方は、万葉集の如き原始歌謡と個人の創作との複雑な錯綜を解明する上に、まことに当を得たものと云えよう。たゞ、氏の論文に於ける第二、第四の段階に於ては人麿と家持という個人性と、それのよって立つ社会との関連の面の於て、今少し不充分な点がある様に思われる。

この他、種〻、と紹介したい論文もあるが紙数の関係上一斑のみ紹介して終ることゝする。

――黒川――